

日本薬学会は126年の伝統を持つ。その学会誌「薬学雑誌」も古い。最古とさえいえなくもない。維新後、明治6年頃から新聞と雑誌の区別ができてきて、明六雑誌(1874)、学芸志林(1877)、東洋学芸雑誌(1881)など多数刊行された。しかし多くは短命で続かなかった。医学関係では順天堂医事雑誌(1875)、東京医事新誌(1877～1960)、東京薬学新誌(1878)など。今につながるものは、順天堂医事研究会雑誌(1887)、成医会月報(1882～、後の東京慈恵医大雑誌)、学会誌では、東京数学会社雑誌(1877、後に数学会と物理学会に分裂)、東京化学会誌(1880)、薬学雑誌(1881)が古い。文明開化の時代以来、名前も変わらず、しっかりと続いている薬学雑誌を我々は誇りに思っている。

その初期の薬学雑誌は、小さく薄く、茶色に変色、丁寧に触らないと破れそう。100年の時を超え、手ざわり、匂いは当時と同じかどうか分からない。しかし、明治の薬学人の活躍ぶり、熱意が随所から伝わってくる。そこで今月から、薬学雑誌を中心に「昔むかし」を幾つか紹介する。引用する原文の、句読点なしカタカナ文ハ読ミヅライノデ、現代仮名遣いに改めることもあるが、たまには旧字体、難読字なども楽しんでもらいたい。

走馬芹(支那ノ通稱)ノ中毒ニ就テ

薬学士 渡邊又治郎 著 薬学雑誌 282号, 721頁(1905)より

明治38年初夏、日露戦役出征中の2つの部隊で兵士が満州のセリを食し、意識不明、両部隊とも死者を出した事件を紹介し、日本の毒セリとの関係を考察している。「(略)痙攣ハ手足ニ跳躍スルガ如キ状態ヲ以テ始マリ次ニ口ヲ開大シ眼瞼筋ニ著明ナル痙攣ヲ来タシ数分時ノ後ニハ強ク口ヲ緊閉シ顔面ハ著シキ「チャノーゼ」ヲ呈セリ手足モ又強直ニ陥リ瞳孔反応及角膜反射共ニ消失シ精液ヲ漏出ス(略)」と症状観察が詳しいのは、医学が未発達な時代、戦地での診断で、とにかく分かることはすべて記録しようとしたからであろう。

有毒のセリ科植物は2種類あり、その成分は、ニコチン

受容体に結合する coniine と GABA 受容体に結合する cicutoxin が知られている。事件後の現地試験で「依的兒(注：エーテル)ニヨリテ抽出シ得タル物ハ阿爾加魯乙度(注：アルカロイド)反應ヲ呈セス」「樹脂様ニシテ酸性且ツ葉ノ芳香ヲ有スルハ Cicutaverosa ノ含有スル「チクトキシン」ト能ク相一致」「戦地ニ於テ操作十分ナルヲ得ザルヲ以テ抽出シ得ザル他ノ成分尚存スルヤモ知レザルモ其生理作用ハ中毒者ノ症状ト相似タリ」と推定している。

心臓の副交感神経刺激で灌流液中に抑制性物質が出るのが発見されたのが1921年。ACh, GABAなどの生理作用は知られておらず、神経伝達物質の概念もない。単に「毒」であり、分析同定も困難な時代であった。Cicutoxinは1915年単離、1953年に構造決定されている。

小林 力